

第500号

2016年(平成28年)7月31日

神資研ニュース

神奈川県資料室研究会

〒210-0011 川崎市川崎区富士見 2-1-4

県立川崎図書館内

TEL: (044) 233-4537

FAX: (044) 210-1146

<https://saas01.netcommons.net/shinshiken/htdocs/>

第633回 例会 ○ 見学会/平成28年6月17日

防災専門図書館

竹田 理恵子 TAKEDA Rieko

(公益財団法人 紙の博物館図書室)

●神資研の6月例会は、防災・災害に関する唯一の専門図書館である防災専門図書館に伺いました。

「防災・災害」を大きく捉えた幅広い収集資料を見せていただき、見ごたえのある企画展もご案内いただきました。

1. 防災専門図書館概要

防災専門図書館は永田町駅より徒歩約5分の日本都市センター会館8階にある。あの赤プリ(赤坂プリンスホテル)があった場所にも近く、プリンス通りに面している。



日本都市センター会館入口

母体の公益社団法人全国市有物件災害共済会とは、全国の市が共同して低廉な分担金で災害に起因する市の財産の損害に対する相互救済事業を行うと共に、都市共有の共済基金を造成して委

託各市の健全な発展と住民福祉の向上に寄与するために昭和24年1月に設立された。当初火災による損害のてん補から始まった共済事業だが、その後落雷、風水害、爆発などの損害もてん補できるように制度が拡大された。その過程において、各種災害についての調査研究の必要性が認識され、内外の災害関係図書・資料・文献類の収集に努めるようになり、昭和30年には2000冊を超えるようになった。共済会の設立より携わっていた田邊義東京市政調査会専務理事(当時)より災害専門の図書館の設立の提案をうけ、昭和31年7月に防災専門図書館は開設された。今年は開館60周年にあたる。



防災専門図書館入口

見学会当日は大久保課長の概要説明、矢野司書

による歴史解説、堀田司書による広報活動の取組と成果についての各説明の後、2 グループに分かれて書庫・閲覧室を見学した。閲覧室では「東日本大震災から5年」の企画展示が行われていて併せてそちらも見学した。

現在の資料総数はおよそ16万冊。その75%が寄贈資料で、市販されていないいわゆる「灰色文献」も多い。各市の地域防災計画や市史なども含まれる。近年ではインターネットを通じてこれらの資料や出版情報の検索は容易になったが、各方面へ寄贈依頼をかけ続ける地道な作業を継続して行っており、先駆者のたゆみない努力の結晶をさらに大きくしているといえよう。

長い図書館の歴史で平成10年より電子化が行われ平成18年よりOPAC公開、平成22年にはかわら版90点のデジタル化とHPへの公開を行った。そして平成23年には東日本大震災が起こっている。

2. 広報活動の強化

平成23年度に「防災専門図書館に関するあり方検討委員会」を設置することとした。

平成24年度に公益社団法人化、平成25年度にはあり方委員会の提言を受けて人員配置もされ、その結果図書館が大きく変わった。この時期に図書館に入職された堀田司書は前職が防災科学技術研究所で、もともと防災専門図書館へは一利用者として伊勢湾台風の災害資料収集のため訪れたのが始まりというのだから、現職はまさに水を得た魚のようなものである。平成26年4月には着任した課長が、この貴重な資料群を「死蔵したらだめ、打って出ること」と来館者倍増計画を立ち上げ、平成26年度を広報元年とし、積極的な広報活動を行ってきた。



日本都市センター会館ロビー階の案内ポスター

具体的には、都心の一等地に位置し、ホテルも入

る瀟洒なビルの中にありながら、動線的には目立ちにくかったので、ビル外壁への看板設置、ロビー階での企画展のポスター掲示により、ビルの内外からの利用者の誘導に取り組んだ。

さらに企画展の開催、図書館総合展へのポスター出展と「防災いろはかるた」の作成、図書館関連催事や学会での講演・宣伝、国立国会図書館東日本大震災アーカイブへのデータ提供、類縁機関との連携等など、様々な広報も行ったことで、平成25年度は週あたり5人であった来館者を平成27年度には22人へと大きく増加させた。



防災いろはかるた

3. 閲覧室見学

オフィスエレベーターで8階に上がればすぐに閲覧室がある。平成26年度からは入館手続きも省略したとのことで閲覧室の扉は大きく開かれ気軽に立ち寄れる雰囲気を作っている。訪問時は閲覧室の半分以上のスペースを使って企画展が開かれていて、廊下に貼られていた東日本大震災時の壁新聞はその導入部となっている。



東日本大震災時に発行された石巻日日新聞社の壁新聞



東日本大震災関連雑誌コーナー



廊下に貼られた熊本地震の概要



関連グッズの現物も並んだ災害食コーナー



現地の新聞も受け入れて公開

閲覧室では、普段は書庫に収蔵されている図書をテーマに合わせて、解説パネルやグッズとともに展示している。閉架式の図書を会場で気軽に手に取れるのは企画展ならではのといえる。

東日本大震災の企画展が行われている中、熊本地震のミニ企画展のコーナーもある。

平成28年4月14日夜に発生した熊本地震の場合、夜間に集めた情報を翌15日出勤後社内に情報提供し、蔵書から明治熊本地震関係や活断層関係などの資料を選び、Web情報を出力して昼にはミニ展示コーナーを仮公開したそうだ。災害発生時には即時に情報収集を開始し、半日後の公開を目指しているとのこと。防災専門図書館ならではの迅速さだ。

4. 書庫内見学

現在の図書所蔵数はおよそ16万冊。3つの閉架書庫に分かれて収蔵されている。書庫は8階(78.3㎡)と9階(110㎡)と地下1階にある。その内8、9階の書庫を案内していただいた。分類ごとに受入順に排架された災害関連の書籍がこれほど揃っているのを見せていただくのは初めてで圧巻であった。

分類は独自分類で大分類としては次の通り。

- 000 災害一般
- 100 火災
- 200 風水害・雪害
- 300 地震・噴火・津波
- 400 交通災害
- 500 農業災害
- 600 鉱・工業災害
- 700 公害(環境・放射能汚染を含む)
- 800 戦災
- 900 その他一般

それぞれ中分類として

- 010 災害論
- 020 災害予防
- 030 災害対策

と続く。

気になる「3 震災・噴火・津波」の中分類は

- 300 総記
- 310 地震学
- 320 震災一般
- 330 震災予防対策

と続き 細分類には

- 312 津波
- 331 耐震建築

等の項目が見える。地理区分を含めると、災害一般(000)～戦災(800)の大分類は、約700の分類に細分類されている。



書庫内の様子

防災専門図書館は相互救済事業の一環としてスタートしたので、火災、交通災害、鉱・工業災害、公害・環境、戦災などの人為災害も対象にしているところが他の類縁機関とは異なる点だという。

9階の書庫には500(農業災害)～800(戦災)の分野の書籍が収められていた。NDCにおける「災害」は369.3にしかない事を考えるとこの独自分類の細かさと書籍の量に驚かされる。

筆者の勤務する図書室もかつて独自分類かNDCか迷った事があった。結局NDCを採用し、独自分類から分類変更した経緯があるが、独自分類には独自分類の強みがある。専門図書館であれば自館

の専門分野はNDCではとても納めきれないからだ。その為NDCを使う場合6ケタ以上の細分類を行い新規分野にも対応しているが、利用者からみれば決して使いやすい分類ではないかもしれない。防災専門図書館の書庫に独自分類と受入順で整然と並んだ図書を見ると、これなら新人にもわかりやすいシステムになっていると感じた。

所蔵資料には、ほかに貴重資料として『火災・地震関係かわら版』90点がありこれらは開館前から集めていた資料とのこと。現在はデジタル化されているが展覧会やイベントなどへの貸出しもあるという。普段はマップケースに収蔵されているものを特別に見せていただいたが、色も鮮やかで、また初めて見る資料も多く興味がつきなかった。かわら版に取り上げられた大地震だけをみてもかなりの頻度で起こった事がわかり、まさに地震国日本を実感した。



火災・地震関係かわら版

5. おわりに

防災専門図書館を訪れるのは全く初めてであり、これほどの資料が揃っている専門図書館とは正直思わなかったので見学では大変衝撃を受けた。

膨大で貴重な資料を利用者であった職員が司書として運用していくという理想的な図書館にうらやましさを感じた。今回の見学では大きな刺激を受けたので、今後の自分の仕事にも活かしていけたらと思った。